

## 1 本論で取り上げる分析の課題

本論における分析課題は次の2点である。

第1の課題は、学生たちのジェンダーにかかわる意識がどのようなことに影響を受けながら形成されているのかという要因を探ることである。第2の課題は、女性の学生（以下女性とし、男子学生は男性と表現する）の自尊感情に影響を与えているものについて探索することである。

いずれにおいてもその形成要因として考えたのが、①これまでの学校教育における教育経験、②家庭や学校での親や教職員からの体験、③女性差別に関する社会動向認識、である。

つまり、第1課題に関する仮説1は「これまでの学校教育において、性教育・男女平等にかかわる教育・ジェンダーにかかわる教育を受けてきた学生ほど、ジェンダーにとらわれていない」であり、仮説2は「これまで家庭や学校で男性や女性の役割分担などを押しつけられてきた学生ほど、ジェンダーにとらわれている」、仮説3は「女性に対する差別が許されない社会動向であると受け止めている学生ほど、ジェンダーにとらわれていない」である。

第2課題に関する仮説1は「これまでの学校教育において、性教育・男女平等にかかわる教育・ジェンダーにかかわる教育を受けてきた女性ほど、自尊感情が高い」であり、仮説2は「これまで家庭や学校で男性や女性の役割分担などを押しつけられてきた女性ほど、自尊感情が低い」、仮説3は「女性に対する差別が許されない社会動向であると受け止めている女性ほど、自尊感情が高い」である。

なお分析に当たっては、スピアマンの順位相関係数を用いた。

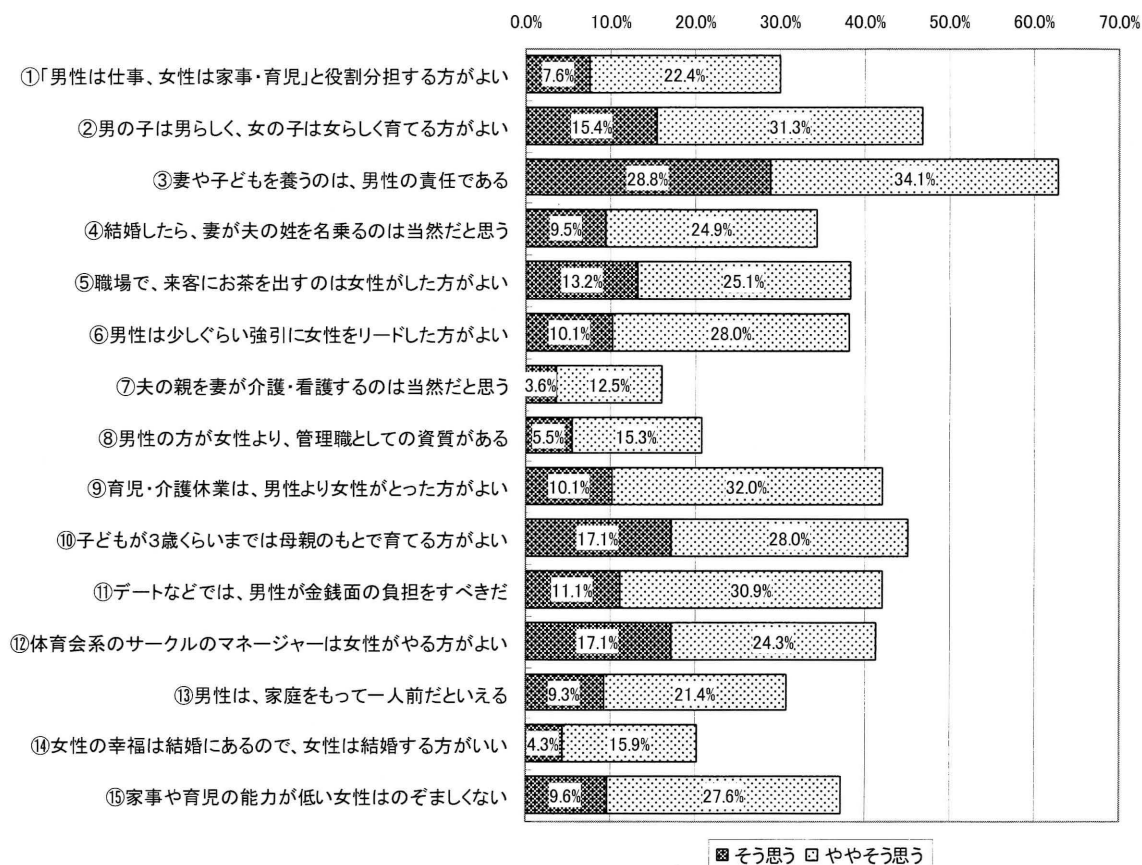
## 2 男性のジェンダー意識の実態とその要因

### (1) 男性のジェンダー意識の実態

問9はジェンダーにかかわる意識をはかる質問である。ここでは男性・女性の役割分担や「男らしさ・女らしさ」などについて17の意見を提示しているが、このうち①から⑮の意見が男性・女性の役割分担や「男らしさ・女らしさ」などを肯定している意見である。図1はこの①から⑮の意見を取り上げ、これらに対する男性における回答結果の内、「そう思う」および「ややそう思う」と肯定的に捉えている割合を図示したものである。

最も高かったのは、「③妻や子どもを養うのは、男性の責任である」に対してであり、「そう思う」が28.8%、「ややそう思う」が34.1%となっておりその合計は62.9%に達している。この他、肯定的な考えの割合が4割を超えていたものには、「②男の子は男らしく、女の子は女の子らしく育てる方がよい」の46.7%、「⑩子どもが3歳くらいまでは母親のもとで育てる方がよい」の45.1%、「⑨育児・介護休業は、男性より女性がとった方がよい」の42.1%、「⑪デートなどでは、男性が金銭面で負担をすべきだ」の42.0%、「⑫体育会系のサークルのマネージャーは女性がやる方がよい」の41.4%がある。

図1 男性における男性・女性の役割分担などについて肯定的考えの割合



## (2) 男性の性教育・男女平等教育・ジェンダー教育の経験とジェンダーにかかわる意識

では、こうした男性のジェンダーにかかわる意識は何によって形成されてきたのであろうか。それを確かめるために第一に取り上げたのは、高等学校までの性教育や男女平等教育、ジェンダー教育の経験である。

そこで、先の問9の①から⑮の男性の回答結果を選択肢の番号通り（そう思う1点、ややそう思う2点、あまりそう思わない3点、そう思わない4点）に得点化し合計した。この合計得点と、問4でジェンダー意識の形成に係わると思われる「6.『男らしさ』『女らしさ』」から「15. 男女共同参画社会」の教育を受けたことの経験の有無との相関関係を調べた。結果は表1の通りであり、いずれの項目間においても統計的に有意な相関関係を認めることはできなかった。

表1 男性におけるこれまでに受けてきた教育内容とジェンダー意識との相関係数

	相関係数
問4. これまでに受けた教育内容	
6. 「男らしさ」「女らしさ」	-0.016
7. 買売春・援助交際	-0.017
8. 恋愛・デートDV	-0.030
9. 結婚・家族	0.045
10. セクシュアル・ハラスメント	-0.011
11. 性的虐待(性被害)	0.045
12. 女性解放運動	0.002
13. 性差別	0.008
14. 条約・法律(女性差別撤廃条約や男女雇用機会均等法など)	0.073
15. 男女共同参画社会	0.009

注) \*\*は1%で有意、\*は5%で有意

### (3) 男性の家庭や学校での体験とジェンダーにかかわる意識

男性のジェンダーにかかわる意識形成要因として次に想定したのは、家庭や学校生活における体験である。

問13では、「2. 家庭内で、『男は妻子を養えなければ一人前ではない』『男なら出世しろ』と言われた」、「3. 家庭内で、『男らしくない』『女らしくない』『男のくせに』『女のくせに』と言われた」、「7. 学校において、教職員は、男子生徒よりも女子生徒に対して甘かった」、「8. 学校において、男子生徒よりも女子生徒の発言が軽んじられることがあった」、「9. 学校において、容姿や体型など外見に対して、からかわれたことがある」、「10. 学校において、主に男性/女性に対してだけ、割り当てられた仕事があった」という、ジェンダーにかかわる意識形成要因として想定した選択肢がある。

これらの回答結果と問9の①から⑮の男性の合計得点との相関関係を調べた。結果は表2の通りであり、問13のいずれの項目においても統計的に有意な相関関係は認められなかった。

表2 男性におけるこれまでの家庭や学校における体験とジェンダー意識との相関係数

	相関係数
問13. 家庭内や学校での経験	
2. 家庭内で、「男は妻子を養えなければ一人前ではない」「男なら出世しろ」と言われた	0.027
3. 家庭内で、「男らしくない」「女らしくない」「男のくせに」「女のくせに」と言われた	0.063
7. 学校において、教職員は、男子生徒よりも女子生徒に対して甘かった	-0.046
8. 学校において、男子生徒よりも女子生徒の発言を軽んじられることがあった	-0.022
9. 学校において、容姿や体型など外見に対して、からかわれたことがある	0.054
10. 学校において、主に男性/女性に対してだけ、割り当てられる仕事があった	-0.023

注) \*\*は1%で有意、\*は5%で有意

### (4) 男性の女性差別に関する社会動向認識とジェンダー意識

さらに、男性における、問20の「女性差別撤廃に関する社会動向認識」と問9の①から⑮の男性の合計得点との相関関係を調べた。相関係数は0.100であったが、有意性は認められなかった。

## (5) 小活

18～19歳という若年層が圧倒的多数を占める男性において、図1の通り、ジェンダーにかかわる意識がすでに深く浸透している状況が示されている。こうした意識の形成要因を探るために、①性教育・男女平等教育・ジェンダー教育の経験や、②家庭や学校での体験、③女性差別に関する社会動向認識との相関関係を調べたが、いずれにおいても有意な結果は示されなかった。

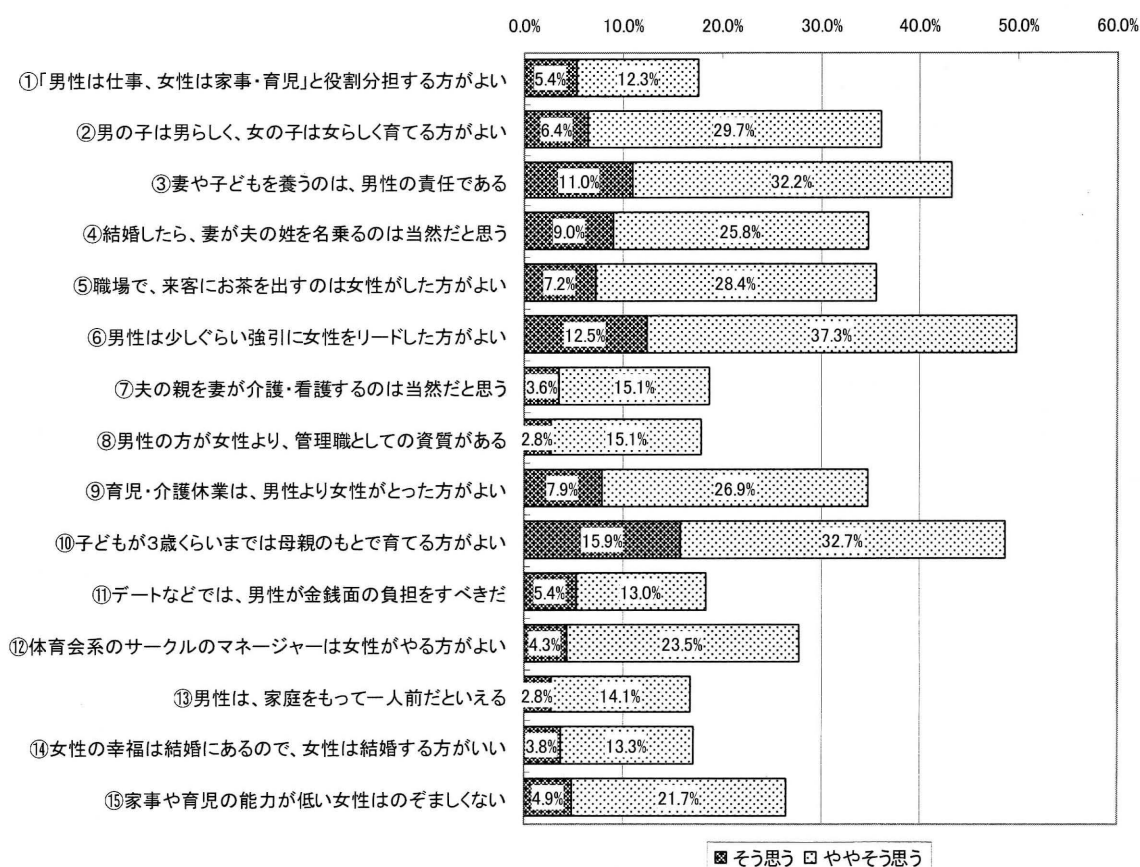
## 3 女性のジェンダーにかかわる意識の実態とその要因

### (1) 女性のジェンダーにかかわる意識の実態

続いて女性においても男性と同じ分析作業を行った。図2は、問9の①から⑮の意見に対する女性における回答結果の内、「そう思う」および「ややそう思う」と肯定的に捉えている割合を図示したものである。

最も高かったのは、「⑥男性は少しくらい強引に女性をリードした方がよい」に対してであり、「そう思う」が12.5%、「ややそう思う」が37.3%となっておりその合計は49.8%であった。この他、肯定的考えの割合が4割を超えていたものには、「⑩子どもが3歳くらいまでは母親のもとで育てる方がよい」の48.6%、「③妻や子どもを養うのは、男性の責任である」の43.2%がある。

図2 女性における男性・女性の役割分担などについて肯定的考えの割合



## (2) 女性の性教育・男女平等教育・ジェンダー教育の経験とジェンダーにかかわる意識

こうした女性のジェンダーにかかわる意識の形成要因を考えてみる。男子学生の場合と同様に、第一に取り上げたのは、高等学校までの性教育や男女平等教育、ジェンダー教育の経験である。

そこで男性の場合と同じく、問9の①から⑮の女性の回答結果を選択肢の番号通り（そう思う1点、ややそう思う2点、あまりそう思わない3点、そう思わない4点）に得点化し合計した。そして、問4でジェンダー意識の形成に係わると思われる「6.『男らしさ』『女らしさ』」から「15. 男女共同参画社会」の教育を受けたことの経験の有無との相関関係を調べた。表3はその結果である。

「買売春・援助交際」、「恋愛・デートDV」、「性的虐待（性被害）」、「女性解放運動」、「性差別」、「条約・法律（女性差別撤廃条約や男女雇用機会均等法など）」についての学習経験のある女性ほど、ジェンダーにかかわる意識が弱いことが示されている。とりわけ、「女性解放運動」や「条約・法律（女性差別撤廃条約や男女雇用機会均等法など）」の学習経験が強く相関していることがわかる。

表3 女性におけるこれまでに受けてきた教育内容とジェンダーにかかわる意識との相関係数

	相関係数
問4. これまでに受けた教育内容	
6. 「男らしさ」「女らしさ」	0.113
7. 買売春・援助交際	0.179**
8. 恋愛・デートDV	0.123*
9. 結婚・家族	0.083
10. セクシュアル・ハラスメント	0.047
11. 性的虐待(性被害)	0.132*
12. 女性解放運動	0.203**
13. 性差別	0.137*
14. 条約・法律(女性差別撤廃条約や男女雇用機会均等法など)	0.235**
15. 男女共同参画社会	0.081

注) \*\*は1%で有意、\*は5%で有意

## (3) 女性の家庭や学校での体験とジェンダーにかかわる意識

ジェンダーにかかわる意識の形成要因として次に想定したのは、家庭や学校生活における体験との関わりである。

問13では、「1. 家庭内で、『女の子だから家事をなさい』と言われた」、「3. 家庭内で、『男らしくない』『女らしくない』『男のくせに』『女のくせに』と言われた」、「7. 学校において、教職員は、男子生徒よりも女子生徒に対して甘かった」、「8. 学校において、男子生徒よりも女子生徒の発言が軽んじられることがあった」、「9. 学校において、容姿や体型など外見に対して、からかわれたことがある」、「10. 学校において、主に男性/女性に対してだけ、割り当てられた仕事があった」という、ジェンダーにかかわる意識形成要因として想定した選択肢がある。

これらの回答結果と問9の①から⑮の女性の合計得点との相関関係を調べた。結果は表4の通りであり、「学校において、容姿や体型など外見に対してからかわれたことがある」との相関関係が認められた。

表 4 女性におけるこれまでの家庭や学校における体験とジェンダー意識との相関係数

	相関係数
問13. 家庭内や学校での経験	
1. 家庭内で、「女の子だから家事をしなさい」と言われた	-0.050
3. 家庭内で、「男らしくない」「女らしくない」「男のくせに」「女のくせに」と言われた	0.072
7. 学校において、教職員は、男子生徒よりも女子生徒に対して甘かった	0.012
8. 学校において、男子生徒よりも女子生徒の発言を軽んじられることがあった	-0.041
9. 学校において、容姿や体型など外見に対して、からかわれたことがある	0.134*
10. 学校において、主に男性/女性に対してだけ、割り当てられる仕事があった	0.024

注) \*\*は1%で有意、\*は5%で有意

#### (4) 女性の女性差別に関する社会動向認識とジェンダー意識

さらに女性の問 20 における女性差別に関する社会動向認識とジェンダーにかかわる意識との関わりを調べた。両者の相関係数は 0.218\*\*であった。問 20 の女性差別に対する A の意見である「今日では差別は許されない状況にあり、差別する人がやがて孤立する」という認識に賛同する女性ほど、ジェンダーにかかわる意識は弱いことが明確に示されている。

#### (5) 小括

女性においても、図 2 の通り、ジェンダーにかかわる意識がすでに深く浸透している状況が示されている。こうした意識の形成に、①性教育・男女平等教育・ジェンダー教育の経験や、②女性差別に関する社会動向認識が影響を与えていることが調査の結果から示された。

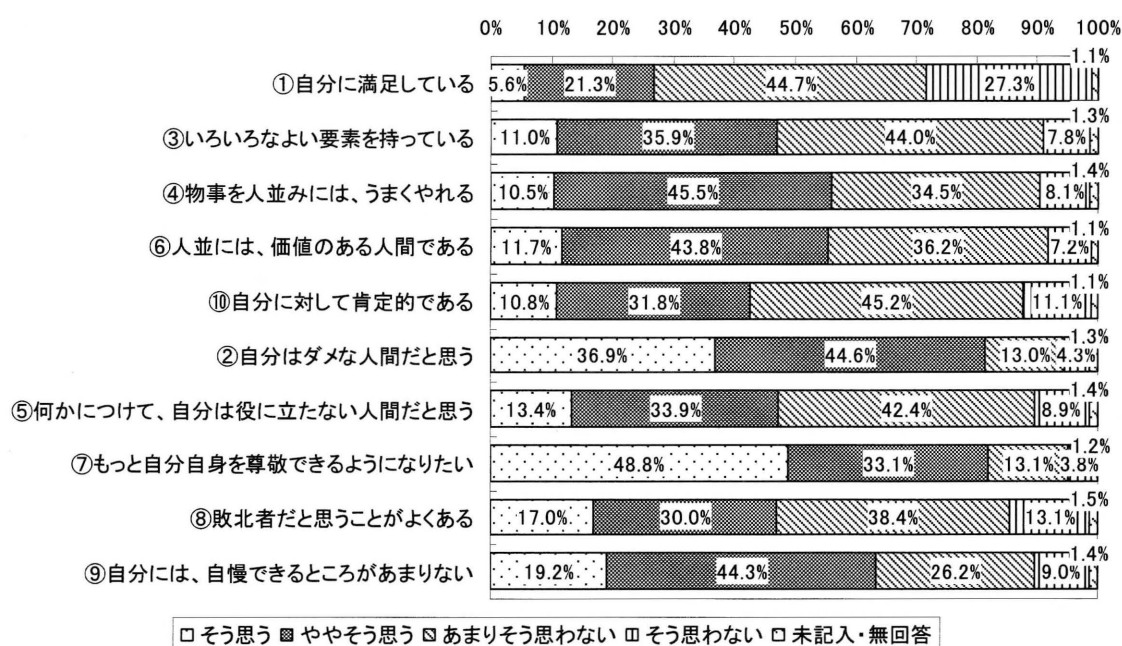
### 4 女性の自尊感情とその要因

#### (1) 自尊感情

問 14 は学生たちの自尊感情をはかる設問であるが、調査の結果は自己否定的回答が多数を占めており驚かされた。とりわけ、「②自分はダメな人間だと思うことがある」との意見に対して、「そう思う」が 36.9%、「ややそう思う」が 44.6%もあり、その合計は 81.5%に達している。自尊感情は他者の人権を尊重する人権意識のベースをなすものであり、深刻な事態であると考えられる。



図3 自尊感情



## (2) 因子分析と女性の自尊感情因子の得点化

問14の回答結果を因子分析した結果、表5の通りの2因子構造であることが明らかになった。ただし、設問②⑧⑦⑤⑨は反転項目であり、1因子構造であることが確認された。

次に女性の因子得点を算出した。③⑥④⑩①については、「そう思う」に4点、「ややそう思う」に3点、「あまりそう思わない」に2点、「そう思わない」に1点を配点し、②⑧⑦⑤⑨については、「そう思う」に1点、「ややそう思う」に2点、「あまりそう思わない」に3点、「そう思わない」に4点を配点した。これらを合計したものを自尊感情得点とした。

表5 自尊感情尺度の因子分析結果

項目	成分1	成分2
③いろいろなよい要素を持っている	0.801	-0.133
⑥人並みには、価値のある人間である	0.778	-0.095
④物事を人並みには、うまくやれる	0.700	-0.084
⑩自分に対して肯定的である	0.682	-0.160
①自分に満足している	0.591	-0.325
②自分はダメな人間だと思う	-0.226	0.745
⑧敗北者だと思えることがよくある	-0.212	0.717
⑦もっと自分自身を尊敬できるようになりたい	0.296	0.627
⑤何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う	-0.423	0.620
⑨自分には、自慢できるところがあまりない	-0.459	0.602
因子抽出法: 主成分分析 回転法: Kaiser の正規化を伴うバリマックス法		
a 3回の反復で回転が収束しました。		

## (3) 女性の自尊感情に影響を与えているもの

女性の自尊感情に影響を与えているものとして、ここでは問9のジェンダーにかかわる意識、問

13 の家庭や学校での体験、問 20 の社会動向認識を取り上げる。

問 9 のジェンダーにかかわる意識は、問 9①から⑮（図 2 参照）の女性による回答結果得点と自尊感情得点との相関係数を調べた。その結果は $-0.037$ であったが、有意性は認められなかった。

問 13 の家庭や学校での体験では、①③⑦⑧⑨⑩の回答結果との相関係数を調べた。その結果は表 6 のとおりであり、「3. 家庭内で、『男らしくない』『女らしくない』『男のくせに』『女のくせに』と言われた」女性ほど、また「9. 学校において、容姿や体型など外見に対して、からかわれたことがある」女性ほど、自尊感情が低いという結果が導かれた。

問 20 の社会動向認識との相関係数は $-0.106$ であったが、有意性は認められなかった。

表 6 女性におけるこれまでの家庭や学校での体験と自尊感情ランクとの相関係数

	相関係数	
問13. 家庭内や学校での経験		
1. 家庭内で、「女の子だから家事をしなさい」と言われた	$-0.081$	
3. 家庭内で、「男らしくない」「女らしくない」「男のくせに」「女のくせに」と言われた	$-0.191$	**
7. 学校において、教職員は、男子生徒よりも女子生徒に対して甘かった	$0.027$	
8. 学校において、男子生徒よりも女子生徒の発言を軽んじられることがあった	$0.027$	
9. 学校において、容姿や体型など外見に対して、からかわれたことがある	$-0.115$	**
10. 学校において、主に男性/女性に対してだけ、割り当てられる仕事があった	$-0.073$	

注) \*\*は 1%で有意、\*は 5%で有意

#### (4) 小活

学生たちの自尊感情は低い。こうした実態は、近畿大学生の特徴なのか、現代の大学生（若者）の傾向なのか、その要因は何なのかなど、大きな課題が提起された。調査では、女性の自尊感情に家庭や学校での体験が影響を与えていることが認められた。しかしジェンダーにかかわる意識や社会動向認識との関わりは示されなかった。

## 5 課題認識

本調査は、現代の学生の性教育・男女平等にかかわる教育・ジェンダーにかかわる教育経験の実態やジェンダーにかかわる意識の実態について、貴重データを提供するものとなった。これらに関しては、単純集計の結果および他の分析者の作業によって示されているとおりである。

本論はそれを踏まえて、こうした学生のジェンダーにかかわる意識や女性の自尊感情が何によって形成されているのかを探ろうとしたものであった。その結果、女性においては、ジェンダーにかかわる意識の形成に、①性教育・男女平等教育・ジェンダー教育の経験や、②女性差別に関する社会動向認識が影響を与えていることが判明した。また、女性の自尊感情に家庭や学校での体験が影響を与えていることなども認められた。

しかし、仮説としても設定した「学校教育における経験」や「家庭や学校での体験」および「社会動向認識」は男性には影響を認められないなど、全体として予想したほどの明確な関わりを示すものではなかった。

推測されることは、こうした要因以上に、雑誌やテレビ、インターネットでの情報、友達との会話や体験など、本調査において想定した以外の様々な社会的要因が強く働いているのではないかということである。ジェンダーにかかわる意識や自尊感情の形成要因について、今後の探求への示唆として受け止めたい。